



女部公房集

新潮日本文学

46

新潮社



© Kobo Abe, Printed in Japan 1970

口絵写真鑑形 田沢 進

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

定価 1200円

安部公房集 新潮日本文学 46

昭和四十五年二月十二日 発行
昭和五十年四月二十日 九刷

著者 安部公房

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部・東京(03)云六―五二二

編集部・東京(03)云六―五二二

振替 東京 四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本 新宿加藤製本

本文用紙 三菱製紙株式会社

扉・見返・カバー用紙 特種製紙株

式会社 表紙クロス 日本クロス

工業株式会社 函用紙 日清紡績

株式会社 製函 文京紙器株式会社

目次

砂の女	5
他人の顔	127
燃えつきた地図	287
*	
デンドロカカリヤ	467
棒	482
水中都市	486
時の崖	505

友

年 解
譜 說

*

達

佐
々
木
基
一

578 567

513

安部公房集

砂の女

——罰がなければ、逃げるたのしみもない——

第一章

1

八月のある日、男が一人、行方不明になった。休暇を利用して、汽車で半日ばかりの海岸に出掛けたきり、消息をたつてしまったのだ。捜索願も、新聞広告も、すべて無駄におわった。

むろん、人間の失踪は、それほど珍しいことではない。統計のうえでも、年間数百件からの失踪届が出されているという。しかも、発見される率は、意外にすくないのだ。

殺人や事故であれば、はっきりとした証拠が残ってくれるし、誘拐のような場合でも、関係者には、一応その動機が

明示されるものである。しかし、そのどちらにも属さないとなると、失踪は、ひどく手掛りのつかみにくいものになつてしまうのだ。仮に、それを純粹な逃亡と呼ぶとすれば、多くの失踪が、どうやらその純粹な逃亡のケースに該当しているらしいのである。

彼の場合も、手掛りのなさという点では、例外でなかった。行先の見当だけは、一応ついていたものの、その方面からそれらしい変死体が発見されたという報告はまるでなかったし、仕事の性質上、誘拐されるような秘密にタッチしていたとは、ちよつと考えられない。また日頃、逃亡をほのめかす言動など、すこしもなかったと言う。

当然のことだが、はじめは誰もが、いずれ秘密の男女関係だろうくらいに想像していた。しかし、男の妻から、彼の旅行の目的が昆虫採集だったと聞かされて、係官も、勤め先の同僚たちも、いささかはぐらかされたような氣持がしたものだ。たしかに、殺虫瓶も、捕虫網も、恋の逃避行の隠れ蓑としては少々と厚げすぎている。それに、絵具箱のような木箱と、水筒を、十文字にかけた、一見登山家風の男がS 駅で下車したことを記憶していた駅員の証言によつて、彼に同行者がなく、まったく一人だったことが確かめられ、その臆測も、根拠薄弱ということになつてしまつたのである。

厭世自殺説もあらわれた。それを言い出したのは、精神分析にこつていた彼の同僚である。一人前の大人になつ

て、いまだ昆虫採集などという役に立たないことに熱中できるのは、それ自体がすでに精神の欠陥を示す証拠だといふわけだ。子供の場合でも、昆虫採集に異常な嗜好をみせるのは、多くエディプス・コンプレックスにとりつかれた子供の場合であり、満たされない欲求の代償として、決して逃げだす気づかいのない虫の死骸に、しきりとピンをつきさしたがつたりするのだという。まして、それが大人になってもやまないとするのは、よくよく病状がこうじ

たしるしに相違ない。昆虫採集家が、しばしば旺盛な所有欲の持主であったり、極端に排他的であったり、盜癖の所有者であったり、男色家であったりするのも、決して偶然ではないのである。そして、そこから厭世自殺までは、あとほんの一步にすぎまい。現に、採集マニアのなかには、採集自体よりも、殺虫瓶のなかの青酸カリに魅せられて、どうしても足を洗うことが出来なくなった者さえいるそうだ。……そう言えば、あの男がわれわれに、その趣味を一度も打ち明けようとしなかったこと自体、彼が自分の趣味を、後ろ暗いものとして自覚していた証拠なのではあるまいか？

だが、そのせつかくのうがった推理も、事実として、死体が発見されなかったのだから、問題にはならなかった。

こうして、誰にも本当の理由がわからないまま、七年たち、民法第三十条によって、けつきよく死亡の認定をうけることになったのである。

2

ある八月の午後、大きな木箱と水筒を、肩から十文字にかけ、まるでこれから山登りでもするように、ズボンの裾を靴下のなかにたくしこんだ、ネズミ色のビケ帽の男が一人、S 駅のプラットホームに降り立った。

だが、このあたりには、わざわざ登るほどの山はない。改札口で切符を受取った駅員も、つい不審の表情で見送った。男はためらいも見せず、駅前のバスの、一番奥の座席に乗り込んだ。それは山とは逆方向に向うバスだった。

男は終点まで乗りつづけた。バスを降りると、ひどく起伏の多い地形だった。低地がせまく仕切られた水田になり、そのあいだに小高い柿島が島のように点在していた。男はそのまま村を通りぬけ、次第に白っぽく枯れていく海辺に向って、さらに歩きつづけた。

やがて人家がつきると、まばらな松林になった。いつか地面は、きめの細かい、足の裏に吸いつくような砂地に交っている。ところどころ、乾いた草むらが砂のくぼみに影をつくり、また間違えたように畳一枚ほどの貧弱なナス畠があつたりしたが、人影らしいものは、まるでなかった。いよいよこの先が目指す海にちがいない。

はじめて男は、足をとめた。あたりを見まわしながら、上衣の袖で汗をぬぐった。おもむろに、木箱を開けて、上

蓋から、たばねた幾本かの棒きれをとりだした。組立てると、捕虫網になった。柄の先で、草むらを叩いたりしながら、また歩きだした。砂の上には、潮のかおりがたちこめていた。

いつまでたっても海は見えなかつた。地面のうねり、見とおしがるいせいか、同じような風景が、際限もなくつづくのだ。それから、とつぜん視界がひらけて、小さな部落があらわれた。高い火の見櫓を中心に、小石でおさえられた板ぶきの屋根がむらがつた、貧しいありふれた村落である。むろん、その中の何軒かは、黒い瓦ぶきだつたり、べにがら色のトタンぶきだつたりした。トタンぶきの建物は、部落の中の唯一の四つ辻の角にあつて、どうやら漁業組合の集合所らしかつた。

この向うに、目的の海も、砂丘もあるのだろう。だがその部落は意外に広かつた。わずかに土が露出しているところもあつたが、大半は白く乾いた砂地だつた。それでも、落花生や芋の畠がつくられていたり、潮のにおいにまじつて、家畜のにおいもした。砂と粘土で、しつこいのように固められた道端には、くだかれた貝殻が、白い山をつくつていたりした。

男がその道を通つていくと、漁業組合の前の空地で遊んでいた子供たちも、傾いた縁側に腰をおろして網をつくらつていた老人も、一軒だけの雑貨屋の店先にたむろしていた髪が薄くなつた女たちも、一瞬その手や口を休め、いぶ

かるような視線をなげかけてきた。しかし男は、一向に気にしない。彼に関心があるのは、もつぱら砂と虫だけだつたのである。

意外なのは、ただ部落の広さだけではなかつた。道が次第に上り坂になつていく。これはまったく予期に反したことだつた。海にむかつている以上は、当然下り坂でしかるべきではあるまいか。地図の読みちがえだつたのだろうか？ ちようど通りかかつた若い娘に、声をかけてみる。娘は、あわてて目をそらせ、まるで聞えなかつたような素振り、行きすぎてしまうのだ。やむをえない。かまわず先に進んでみることにしよう。とにかく、砂の色や、魚の網や、貝殻の山などで、海が近いことだけは確かなのだから。事実、危険を予知させるものなど、まだ何もなかつた。

道はますます急な上り坂になり、ますます砂らしい砂になつた。

ただ、奇妙なことに、家の建っている部分は、すこしも高くないのだ。道だけが高くなつて、部落自身は、いつまでも平坦なのだ。いや、道だけでなく、建物と建物のあいだの境の部分も、道とおなじように高くなつていた。だから、見方によっては、部落全体が上り坂になつてゐるのに、建物の部分だけが、そのままとの平面にとり残されてゐるようでもある。この印象は、先に進むにつれてひどくなり、やがて、すべての家が、砂の斜面を掘り下げ、

そのくぼみの中に建てたように見えてきた。さらに、砂の斜面のほうに、屋根の高さよりも高くなった。家並は、砂のくぼみの中に、しだいに深く沈んでいった。

傾斜が急にけわしくなった。このあたりでは、屋根のてっぺんまで、すくなく見つもつても、二十メートルはあるだろう。一体どんな暮しをしているのか、奇怪な思いで深い穴の底の一つをのぞきこもうと、縁にそってまわりこむと、とつぜん激しい風に、息をつまらせた。いきなり視界がひらけ、にぎった海が泡立ちながら、眼下の波打ちぎわを舐めていた。目指す砂丘の頂上に立っているのだった。

季節風が吹きつける、海に面した部分は、砂丘の定石じょうせきどおり、盛上ったような急傾斜で、葉の薄い禾本科こむぎの植物が、すこしでもなだらかな部分をえらんで、細々と群がっている。だが、部落の側を振り返ると、砂丘の頂上に近いほど深く掘られた、大きな穴が、部落の中心にむかって幾層にも並び、まるで壊れかかった蜂の巣である。砂丘に村が、重なりあつてしまつたのだ。あるいは、村に砂丘が、重なりあつてしまつたのだ。いずれにしても、背立たしい、人を落着かせない風景だつた。

しかし、目指す砂丘にたどりつけたのだから、これでいい。男は水筒の水をふくみ、それから口いっぱいに風をふくむと、透明にみえたその風が、口のなかでざらついた。

砂地にすむ昆虫の採集が、男の目的だつたのである。

むろん、砂地の虫は、形も小さく、地味である。だが、一人前の採集マニアともなれば、蝶やトンボなどに、目をつくれたりするものでない。彼等マニア連中がねらっているのは、自分の標本箱を派手にかざることでもなければ、分類学的関心でもなく、またむろん漢方薬の原料さがしでもない。昆虫採集には、もつと素朴で、直接的なよろこびがあるのだ。新種の発見というやつである。それにありつけさえすれば、長いラテン語の学名といっしょに、自分の名前もイタリック活字で、昆虫大図鑑に書きとめられ、そしておそらく、半永久的に保存されることだろう。たとえ、虫のかたちをかりても、ながく人々の記憶の中にとどまれるとすれば、努力のいかいもあるというものだ。

そういうチャンスは、やはりどうしても、変種が多くて目立たない、小昆虫の仲間が多かつた。それで彼も、ながいあいだ、人のいやがる双翅目しゅうしゅうの、それも蠅の仲間を目をつけて来たものだ。たしかに、蠅の種属は、おどろくほど豊富である。とは言え、人間の考えることは大体同じようなものらしく、日本で八匹目というような珍種まで、ほとんどあさりつくされてしまつていた。どうやら、蠅の生活環境が、人間の環境にあまり近すぎたためらしい。

むしろ最初から、その環境のほうに着目してかかれればよかつたのだ。変種が多いということは、とりもなおさず、それだけ適応性が強いということではあるまいか。この発見に彼は小踊りした。おれの思いつきも、まんざらじゃな

い。適応性が強いということは、他の昆虫には住めないような悪い環境でも、平気だということだろう。たとえば、すべての生物が死に絶えた、沙漠のような……

以来、彼は、砂地に関心を示しはじめた。そして間もなく、その効果があらわれた。ある日、家の近くの河原で、鞘翅目ハンミョウ属の、ニワハンミョウ (*Cicindela Japana*, Motschulsky) に似た、小つぼけな薄桃色の虫を見つけたのだ。むろん、ニワハンミョウに、色や模様の変りものが多いことは、周知の事実である。しかし、前足の形ということになれば、話はまた別だ。鞘翅目の前足は、類別のための大切な規準であり、前足の形がちがえば、それはもう種がちがいを意味している。その、彼の日にとまった虫の、前足の第二節目は、じつにきわだった特徴をもっていたのである。

ふつう、ハンミョウ属の前足は、いかにも敏捷びんせうそうに、黒くほっそりしているものだ。ところが、そいつの前足ときたら、まるで部厚い鞆をかぶせたように、もっこりとしていて、黄味がかっていた。むろん、花粉がまぶされていたのかもしれない。だとしても、花粉を附着させておくための、なんらかの装置——たとえば、毛のようなもの——が、あったかもしれないということは、じゅうぶんに考えられることだ。もし、彼の見間違いでなければ、これは大変な発見になるはずのものだった。

ただし、残念なことに、とり逃がしてしまったのである。

少々興奮しすぎていたせいもあり、それにハンミョウというやつは、ひどくまぎらわしい飛び方をする。飛んで逃げては、まるでつかまえてくれと言わんばかりに、くるりと振り向いて待ちうける。信用して近づくと、また飛んで逃げては、振り向いて待つ。さんざん、じらしておいて、最後に草むらの中に消えてしまうという寸法だ。

こうして彼は、その黄色い前足をもったニワハンミョウに、すっかりとりこにされたのであった。

砂地に注目した彼の見当はどうやら間違っていないかららしい。事実、ハンミョウ属は、代表的な沙漠の昆虫でもあった。一説によると、その奇妙な飛び方は、ねらった小動物を巣からさそい出すための罠なのだともいう。たとえば、ネズミやトカゲなどが、ついさそわれて沙漠の奥に迷いこみ、飢えと疲労でたおれるのを待つて、その死体を餌食にするというのである。フミツカイなどと、いかにも優雅な和名をもち、一見優男風の姿をしていながら、実は鋭い顎をもち、共食いさえ辞さないほどの獷猛な性質なのだ。その説の真偽はさておいても、すくなくも彼が、ニワハンミョウの妖しい足どりに、すっかり魅せられてしまったことだけは、もはや疑えないことだった。

そうなると、そのニワハンミョウを存在させる条件である、砂に対する関心も、いやがうえにも高まらざるを得ない。彼はいろいろと、砂に関する文献に目をおしたりしはじめた。しらべてみると、砂というやつも、なかなか面

白いものだ。たとえば、百科辞典で砂の項目をひいてみると、次のように書いてある。

砂——岩石の碎片の集合体。時として磁鉄鉱、錫、石、まれに砂金等をふくむ。直径 $2 \sim 1/16$ mm。

いかにも明瞭な定義である。砂とは要するに、碎けた岩石のなかの、石ころと粘土の間だということだ。しかし、単に中間物というだけでは、まだ完全な説明とは言いがたい。石と、砂と、粘土の三つが、複雑にまじり合っている土の中から、なぜとくに砂だけがふるい分けられ、独立の沙漠や砂地などになりえたのか？もし単なる中間物なら、風化や水の侵蝕は、岩肌と粘土地帯とのあいだに、互いに移行する無数の中間形態をつくりえたはずである。

ところが現実には存在するのは、石と、砂と、粘土、はっきり区別することができる三つの相だけなのだ。さらに奇妙なことには、それが砂であるかぎり、江之島海岸の砂であろうと、ゴビ沙漠の砂であろうと、その粒の大きさにはほとんど変化がなく、 $1/16$ mm.を中心し、ほぼガウスの誤差曲線にちかいカーブをえがいて分布していると言いうことである。

ある解説書は、風化や水の侵蝕による土の分解を、ごく単純に、軽いものから順に遠くに飛ばされる結果だと説明していた。しかしそれでは、直径 $1/16$ mm.のもつ特別な意

味は、解き明かせない。それに対して、べつの地質学書は、次のような説明をくわえていた。

水にしても、空気にしても、すべて流れは乱流をひきおこす。その乱流の最小波長が、沙漠の砂の直径に、ほぼ等しいというのである。この特性によって、砂だけが、とくに土のなかから選ばれて、流れと直角の方向に吸い出される。土の結合力が弱ければ、石はもちろん、粘土でさえ飛ばないような微風によっても、砂はいったん空中に吸い上げられ、再び落下しながら、風下にむかって移動させられるというわけだ。どうやら、砂の特性は、もっぱら流体力学に属する問題らしかった。

そこで、さきの定義につけ加えれば——

「……なお、岩石の破砕物中、流体によってもっとも移動させられやすい大きさの粒子。」

地上に、風や流れがある以上、砂地の形成は、避けがたいものかもしれない。風が吹き、川が流れ、海が波うっているかぎり、砂はつきつきと土壤の中からうみだされ、まるで生き物のように、ところをわづ這ってまわるのだ。砂は決して休まない。静かに、しかし確実に、地表を犯し、亡ぼしていく……

その、流動する砂のイメージは、彼に言いようのない衝撃と、興奮をあたえた。砂の不毛は、ふつう考えられてい

るように、単なる乾燥のせいなどではなく、その絶えざる流動によって、いかなる生物をも、一切うけつけようとしない点にあるらしいのだ。年中しがみついていることばかりを強要しつづける、この現実のうつつとしさとくらべて、なんといい違いだろう。

たしかに、砂は、生存には適していない。しかし、定着が、生存にとって、絶対不可欠なものでどうか。定着に固執しようとするからこそ、あのいとわしい競争もはじまるのではなからうか？ もし、定着をやめて、砂の流動に身をまかせてしまえば、もはや競争もありえないはずである。現に、沙漠にも花が咲き、虫やけものが住んでいる。強い適応能力を利用して、競争圏外にのがれた生き物たちだ。たとえば、彼のハンミョウ属のように……

流動する砂の姿を心に描きながら、彼はときおり、自分自身が流動しはじめているような錯覚にとらわれさえするのだった。

3

半月形にそそり立ち、城壁のように部落をとりまいてる砂丘の稜線にそって、男はうつむきかげんに歩きだした。遠景にはほとんど気をとめなかった。昆虫採集家にとって必要なのは、足もとから半径三メートルばかりのあいだに、全注意力を集中しきることだった。なるべく太陽を

背にしないことも、必要な心得の一つだろう。太陽を背にしては、自分の影で、昆虫どもを驚かせてしまうことになる。だから、採集マニアの額と鼻の頭は、いつもまっ黒にやけている。

男は、同じ歩調で、ゆつくりと進んで行った。一歩踏みだすごとに、砂がめくれ上って、靴の上を流れた。適当な湿度さえあれば、一日で芽をふきそうな雑草が、ところどころに浅い根をひろげている以外、生物らしいものの影一つない。ときたま、飛んで来るものがあれば、人間の汗の臭いをかぎつけてきた、ベッコウバエくらいのものである。しかし、こういう所だからこそ、期待も出来るというものだ。とくにハンミョウ属は、群居をきらい、極端な場合には一キロ四方を、たった一匹で縄張りに行っていることさえあるという。根気よく、歩きまわるしかなかった。

ふと立ちどまった。草の根元で、何かが動いた。クモだった。クモには用はない。一服するつもりで、腰をおろした。絶えまなく、海から風が吹きつづける、はるか眼の下の砂丘のふもとを、ちぎれた白い波が噛んでいる。西の方角の、砂丘が尽きたあたりに、岩肌をむきだしにした小高い丘が、海にむかって突きだしている。その上で、太陽が、砥いだ針の先をたばねたような光を空いっぱいにまきちらしていた。

マッチはなかなかつかなかった。十本ずつたのが、十本とも駄目だった。すてたマッチの軸にそって、時計の秒針

ほどの速度で、砂の波が移動している。波の一つに、目標をさだめ、それがちょうど靴の踵の端にとどいたときに、立上った。ズボンのひだから、砂がこぼれた。唾をばくと、口の中もざらついていた。

それにしても、昆虫の数が少なすぎはしまいか？ 砂の移動が、激しすぎるのかもしれない。いや、落胆はまだ早いだらう。理論が可能性を保証してくれているのだから。

砂丘の稜線が平たくなって、海と反対の側に、張り出している部分があった。いかにも獲物がありそうな感じにさわられて、ゆるやかな斜面を降りてゆくと、實の砂防垣らしいものの名残りが点々とその先端をのぞかせている向うに、さらに一段低くなった台地があった。機械でつけたように、規則正しく刻まれた風紋を横切って進むと、ふいに視界が切れて、深いほら穴を見下ろす、崖際に立っているのだった。

その穴は、幅二十メートルあまりの、いびつな楕円形をしていた。向う側が、比較的ゆるやかに見えるのに対して、こちら側は、ほとんど垂直に近く感じられた。厚い陶器のふちのように、なめらかな曲線をえがいて足もとにめくれこんでいる。その端に、こわごわ片足をのせ、のぞきこむ。穴の中は、周囲の明るさとは対照的に、すでに日暮がせまっていることを告げていた。

暗がりの底に、棟の一方の端を、斜めに砂の壁につき立てるようにして、小さな家が一軒、ひっそりと沈んでい

た。まるで牡蠣のようだと思う。

いずれ、砂の法則に、さからえるはずもないのに……カメラをかまえたのと、同時に、足もとの砂が、さらさらと流れだした。ぞっとして、足をひいたが、砂の流れはしばらくやもうともしない。なんという微妙で危険な均衡だ。息をはずませながら、ざわつく手のひらを、何度もズボンのわきにこすりつけた。

耳もとで、咳きこむ声があった。いつのまにやら、村の漁師らしい老人が一人、肩をすりつけんばかりにして立っているのだ。カメラと、穴の底とを見くらべながら、なめしかけの兎の皮のような頬を、皺だらけにして笑いかけてくる。充血した眼のふちに、めやにが、厚い層になってこびりついていた。

「調査ですかい？」

風に吹きさらされ、携帯用ラジオのように、幅のない声だ。しかし、アクセントははっきりしていて、べつに聞きとりにくいほどではなかった。

「調査だって？」男は、狼狽気味に、レンズの上を掌でかくし、相手の目につきやすいように、捕虫網を持ちなおしながら、「なんの話だか、よく分らないが……ほくは、ほくは、昆虫採集をしているんですよ。こういう、砂地の虫が、ほくの専門でね。」

「なんだって？」
どうやら相手にはうまく飲み込めなかったらしい。

「昆、虫、採、集！」と、もう一度大声でくりかえし、「虫ですよ、虫！……こうして、虫を捕るんだよ！」

「虫……？」

老人は、疑わしげに、目をふせて唾をはいた。と言うより、口からたれるにまかせたと言ったほうが正しいかもしれない。風に吹きちぎられて、唇の端から、糸をひいて飛んだ。いったい何がそんなに気になるのだろうか？

「なにか、この辺の調査でも、あるんですか？」

「いや、調査でなけりゃ、かまわななんだがね……」

「ちがいますよ。」

老人は、うなずくともなく、そのまま彼に背を向けて、藁草履の爪先を蹴るようにしながら、のろのろと稜線にそって引返して行つた。

五十メートルほど向うに、いつ現われたのか、同じような服装の男が三人、じつと地面にしゃがみこんで、老人を待ちうけている様子である。そのなかの一人が、膝の上でくるくるまわしているのは、どうやら双眼鏡らしい。やがて、老人を加えた四人は、何事か相談をしはじめる。交互に、足もとの砂をひっかくような仕種で、かなり激しいやりとりが行われている様子だった。

かまわずハンミョウ探しをつづけようとしているところに、老人がまたあわただしくやって来て、

「すると、あんた、本当に県庁の人じゃないんですね？」

「県庁？……とんだ人違いだよ……」

もう沢山だと言わんばかりに、乱暴に名刺をつき出すと、老人は唇を動かしながら、ながい時間をかけて読み取り、

「ははあ、学校の先生かね……」

「県庁だなんて、なんの関係もありやしませんよ。」

「ふうん、先生をしておいでするのかね……」

やっと、納得がいったらしく、目尻いっぱい皺をよせ、名刺を前にささげようしながら、もどつていく。それでどうやら、あとの三人も満足したらしく、そのまま腰をあげて、引揚げて行つた。

老人だけが、もう一度、こちらに引返して来た。

「ときに、あんた、これからどうなさるつもりですか？」

「どうって、だから、虫さがしですよ。」

「けど、上りのバスは、もう終いですが……」

「どこか、泊るところくらいはあるんでしょう。」

「泊るって、この部落にかね？」

老人の顔のどこかが、ひくついた。

「ここが駄目なら、隣の村まで歩きますよ。」

「歩く……？」

「どうせ、急いでいるわけじゃないんだから……」

「いやいや、なにもそんな面倒することはあるまいさ……」

「急に世話好きらしい、まぐし立てるような調子になり、ごらんのとおり、貧乏村で、ろくな家もないが、あんたさえよけりゃ、口をきくくらい、わたしが世話して

あげるがね。」

べつに、悪意があったわけではなさそうだ。彼等はただ何か——たぶん、調査に来る予定の県の役人かなにか——を、警戒していただけなのだ。警戒が解けてしまえば、善良な、ただの漁民たちにすぎない。

「そうしてもらえりゃ、そりゃ、有難いですねえ……むろん、お礼はします……ぼくは、こういう民家なんかにとめてもらうのが、大好きでね……」

4

ころもち、風をやわらげながら、日が暮れた。男は、砂に刻まれた風紋が見分けられなくなるまで、砂丘の上を歩きまわった。

収穫らしい収穫は、まるでなかった。

直翹目のコバネササキリモドキと、ヒゲジロハサミムシ。

有物目のアカスジカメムシと、名前ははつきりしないが、やはりカメムシの一種。

目指す鞘翹目では、シリジロゾウムシに、アシナガオトシブミ。

肝心のハンミョウ属には、一匹もお目にかかれずじまい。しかし、だからこそ、明日の戦果がたのしみだとも言えるわけだが……

疲労が眼の奥で、淡い光の点になって、飛びまわる。そのたびに、思わず足をとめて、暗い砂丘の肌を目をこらす。動くものは、なんでも、ニワハンミョウに見えてしかたなかった。

約束どおり、老人が、組合事務所の前で待っていてくれた。

「すみませんねえ……」

「なんの、あんたの気に入ってくれさえすりゃいいが……」
寄り合いでもあるらしく、事務所の奥に、四、五人の男が車座になって、笑い声をたてていた。玄関の正面に《愛郷精神》と、大きな横書きの額がかかっている。老人が、

なにやら声をかけると、笑い声がびたりとやんだ。そのまゝ、うながすように、先に立って歩きだした。貝殻をまいた道が、薄暗がりの中に、ほの白く浮んでいた。

案内されたのは、部落の一番外側にある、砂丘の稜線に接した穴のなかの一つだった。

稜線よりも、一本内側の細い道を右に折れ、しばらく行つたところで、老人が、暗がりの中に身をこごめ、手を打ちながら大声で叫んだ。

「おい、婆さんよお！」

足もとの闇のなかから、ランプの灯がゆらいで、答えがあった。

「ここ、ここ……その俵のわきに、梯子があるから……」
なるほど、梯子でもつかわなければ、この砂の崖ではと